

ご支援いただいたみなさまへ

お父さんたちのネットワーク

石垣政裕

支援のご報告No.20

ークリスマスを迎える南相馬へー

野火

日本の和歌に幾度となく登場してくる「野火」は春の季語です。私たちは冬を迎えたばかりの感のある福島 of 海岸地帯を、前回と同じように南下します。「冬こもり春の大野を焼く人は焼き足らねかも我が心焼く」は万葉集に出てくる恋の歌。野火を見る自分をこころを歌っています。

国道6号線で相馬を抜けると、ついこの間まで瓦礫片付けの重機がせわしなく動いていた田圃には、何台もの軽トラックと農作業の人びとが働いている。ふと、いまわしい原発事故さえなければいつもの年の春を待つ農村の風景と全く変わりがありません。何カ所かに焚かれた野火は、なにを燃やしているのでしょうか。遮る物が何もない風景の中をゆったりと天に昇っていく。除染という気の遠くなるような作業が提案され、洗い流したり吸着させたりすれば、あたかも放射性物質がなくなるような印象を与えていますが、吸着させた物質や洗浄水をその後どう処分すればいいのか、その先を誰も声に出すことはできません。しかし、9ヶ月以上も経って、何かをせずにはいられない人びとの苦悩がこの野火となって燃えているのではないかと感じるほど、野火は私自身内にもくすぶっています。後で聞いたのですが、表土をはぎ取り、耕せば放射線量は低くなると指導されているということ。それは汚染物質を拡散しただけであって、かえって除去を困難にしてしまうのではなからうかとつい思うのです、まるで自分を” 異邦人” とするよう。



すっかり裸になってしまった園庭

クリスマスイブの日に

ちょうどクリスマス・イブの12月24

日、私たちはドイツの空手や和太鼓をやっているグループHelfen per Handschlag e.V. から送られた支援金を携えて南相馬市の聖愛保育園を訪ねました。子供、妊婦、要介護者、入院患者の方の立ち入りが制限されていた「緊急時避難準備区域」の指定が解かれ、避難していた隣の南相馬市鹿島区から原町区にあるもとの園舎にもどった保育園に入ると、子どもたちは50人ほどだというのが、なんとなく華やいだ声が聞こえるようにも思えます。公立の保育所はまだ

開園されていません。そのめどもたっていません。

園庭を見ると、枝葉を見事に切り落とされた木が何本かある。うっそうとした葉が園庭を覆っていたという話がいつの話かというように、園庭には冬の光があっけらかんと降り注いでいる。通ってくる子どもたちのために表土をはぎとり、殺風景になったので芝を植えたと園長先生は忙しい合間を縫って対応して下さいました。そして、遠くドイツから送られてきた支援金に感謝をしておられました。



中央が遠藤園長先生

ほんとうのクリスマスプレゼント

困難な状況にあっても、一生懸命に子どもたちのために保育園を運営し続ける保育所のスタッフの心こそが「ほんとうのクリスマスプレゼント」であり、訪れた私たちすらその心を分けていただいたようで、支援して下さいたドイツの友人たちに深く感謝することにいたします。